

『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』における「唱歌」

- 「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」に着目して -

鈴木慎一郎*

On Song in *Guidance Book for Kindergarten : Music Rhythm:*
Focusing on Singing Music and Instrumental Music

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』, 唱歌, 童謡, わらべうた, 日本教育音楽協会
Key Words: *Guidance Book for Kindergarten : Music Rhythm*, Song, Children's Song, Old Children's Song,
Japan Education Music Society

はじめに

本稿の目的は、1953（昭和28）年刊行の文部省『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』における「唱歌」の位置付けを明らかにすることである。

1948（昭和23）年、日本で最初の保育内容に関する基準文書である『保育要領』が文部省から刊行される。作成に関しては、これまでC I & E（民間情報教育局）のヘレン・ヘファナン（H. Heffernan, 1896-1987）の主導で、倉橋惣三（1882-1955）を中心に進められたと理解されていた。しかし、加藤繁美により、文部省学校教育局青少年教育課長であった坂元彦太郎（1904-1995）の方からヘファナンに援助を求め、日本側の主体性と各委員が創造的に原案作成に関与した事実が明らかにされる¹。

1953（昭和28）年には『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』が刊行される。これに関する先行研究としては、第一に田邊圭子²、入江真理³があり、豊富な資料に検証されているものの、「音楽リズム」という概念や音楽表現と身体表現との関係に着目した研究であるため、歌唱については論じられていない。第二に古山律子⁴が、歌唱教材について分析を行い、「季節感を伴い幼児の身近なものばかりである。幼児の呼吸や間合いに即し、遊びや生活と音楽的・身体的表現が密接に関わり合う展開が予測でき

る」と考察する。しかしながら、唱歌を視点において考察はなされていない。『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』は、戦後の幼児教育の指針であり、戦前からの連続性・非連続性を探る貴重な資料である。これを分析することにより、戦前に編纂された唱歌が戦後にどのように継承されたかを解明することができる。

ところで2018（平成30）年告示の『幼稚園教育要領』では、新たに「唱歌」に親しむことが盛り込まれた。しかしながら、幼児教育では共通教材や教科書もなく、保育者自身が「唱歌」の定義を十分理解できていないこともあり、困惑している状況である。また、歌詞が難解であったり、曲調が古めかしかったりすることもあり、子どもたちの興味・関心も低いことが予想される。とはいうものの、唱歌には、自然や四季の美しさを題材とした楽曲が多く、後世に伝えていきたい文化である。そこで筆者は、幼児教育対象の唱歌集のデータベース化を行い、カリキュラムを構築することを計画している。

『幼稚園のための指導書：音楽リズム編』には、39曲の「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」が紹介される。本稿では、39曲における「唱歌」の位置付けを明確にし、傾向を分析することで、上記のカリキュラム構築をする際の重要な資料としたい。

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

I. 『幼稚園のための指導書: 音楽リズム編』

1. 委員および関係協力者

保育要領改訂委員会委員および関係協力者は、下記の通りである⁵⁾。

安藤寿美江 東京学芸大学附属幼稚園教諭
 泉俊男 元文部省初等中等教育局初等教育課
 伊藤忠二 文部省初等中等教育局初等教育課
 大島文義 文部省初等中等教育局初等教育課長
 菊池フジノ お茶の水女子大学附属幼稚園教諭
 邦正美 日本教育舞踊研究会会長
 小林つや江 東京教育大学附属小学校教諭
 酒田富治 東京世田谷区尾山台小学校教諭
 坂元彦太郎 岡山大学教育学部長
 沢野千年 昭和幼稚園長
 鹿内瑞子 文部省初等中等教育局初等教育課
 関根保江 東京都杉並区杉並第九小学校教諭
 玉越三朗 文部省初等中等教育局初等教育課
 近森一重 元文部省初等中等教育局中等教育課
 土屋まさ 日出学園幼稚科主事
 平間修 文化財保護委員会無形文化課長
 真篠将 文部省初等中等教育局初等教育課
 増子トシ 東京都庁民生局児童部技師
 水谷光 文部省初等中等教育局中等教育課
 諸井三郎 文部省社会教育局視学官
 山下俊郎 東京都立大学教授
 山村きよ 東京都文京区立第一幼稚園長

『保育要領』では、幼児の保育内容として、「見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画、製作、自然観察、ごっこ遊び、人形芝居、健康保育、年中行事」の12項目が挙げられた。「リズム」を提案したのは、坂元彦太郎である⁶⁾。坂本は1940(大正15)年、東京帝国大学文学部を卒業。1943(昭和18)年、岡山師範学校女子部長、1945(昭和20)年、大阪師範学校女子部長、1946(昭和21)年、文部省青少年教育課長同初等教育課長、1949(昭和24)年、岡山大学教育学部長を務めた。

戦後直後の文部省は、大臣官房、学校教育局、社会教育局、科学教育局、体育局、教科書局、調査局、教育施設局で組織されていた。1949(昭和24)年、「文部省設置法」が施行され、教科書局は廃止され、「初等中等教育局」が新設される。新たに音楽を専門とする担当者も置かれることになり、「初等教育課」に真篠将、青柳善吾、「中等教育課」に近森一重、花村大が配属される⁷⁾。

音楽の学習指導要領を作成した諸井三郎

(1903-1977)は、1946(昭和21)年、文部省社会教育局に入り、坂元からの要請を受け、教科書局図書監修官も兼務する⁸⁾。

ところで、1935(昭和10)年、園田清秀(1903-1935)は「絶対音早教育」を発表し、笈田光吉(1902-1964)によって「絶対音感を基調とする音楽教育」として体系づけられる。1910(昭和10)年、金富尋常小学校(現、文京区立金富小学校)訓導であった佐々木幸徳と、本町尋常小学校(現、渋谷区立小中一貫教育校渋谷本町学園)訓導であった酒田富治が、東京銀座の笈田の私塾の幼稚科第二部生(小学生)の指導を任される⁹⁾。このように音感教育の推進者であった酒田が、委員として加わっている。しかし、『幼稚園のための指導書』において音感教育は取り上げられていない。

酒田は、最初に《ぞうさん》を作曲した人物でもある。酒田はまど・みちお(1909-2014)に作詞を依頼し、1951(昭和26)年、酒田によって作曲される。しかし、まどの知人の佐藤義美(1905-1968)が内緒でNHKに持ち込み、團伊玖磨(1924-2001)によって作曲され、NHKラジオで放送され、ヒットする¹⁰⁾。

諸井と酒田は、1958(昭和33)年、『保育のための音楽教育』を出版する。心理学を専門とする山下俊郎(1903-1982)の「序」によって始まる。諸井は東京帝国大学文学部で美学を専攻し、「スルヤ」楽団を結成し、音楽活動を展開していた作曲家であり、学校教育に携わっていなかった¹¹⁾。『保育のための音楽教育』では最初の「音楽的環境について」を執筆したのみで、それ以外の大部分は酒田によって執筆される。諸井は「早期教育は、音楽家を作るために、必要なだけでなく、すべての子供たちに音楽的によい趣味を持たせることにとつても、極めて必要なのである。その具体的な方法は、専門家を作る場合の教育法とは異つた面をも内包してくるかも知れないが」と述べる¹²⁾。酒田は歌唱に関して、若干、童謡については触れてはいるが、唱歌やわらべうたといった区分での記載はされていない。

真篠将(1916-2014)は、1935(昭和10)年、山形県師範学校を卒業後、小学校へ奉職。1937(昭和12)年、山形県師範学校専攻科へ入学、1938(昭和13)年、卒業し、東京音楽学校甲種師範科へ入学、1941(昭和16)年、卒業。愛知県第一師範学校、永田町国民学校(現、千代田区立麹町小学校)、東京音楽学校を歴任の後、1945(昭和20)年、東京文理科大学教育学科へ入学、1948(昭和23)年、卒業し、研究科へ在籍。同年秋、文部省へ入る。真篠は次のように回想する¹³⁾。

省内には当時、音楽だけではなく、全教科の担当者を整備しようという気運が起って来ていたと思うんです。私が、大学で教わった恩師の石山修平先生が文部省に入っておられたことと、それから近森（一重）先生とは永田町国民学校時代もいろいろつながりがあったんです。近森さんとは音楽学校時代にうちの親父の教え子で、そんなこともあったかも知れませんが、石山先生と相談されたみたいです。だから私は今でも、近森先生が呼んでくれたと思っています。それに石山先生がバックになってくれたと思います。

また、真篠は「小学校の音楽教諭であったこと、当時の文部省には、幼稚園関係者の中に、音楽に関することをやっている人がいなかったために、音楽リズムに関する会議や省案作りに関わった」と述べる¹⁴。

小林つや江（1901-1987）は、1920（大正9）年、長野県女子師範学校卒業後、東京音楽学校甲種師範科入学、1923（大正12）年、卒業、愛知県女子師範学校教諭となる。1925（大正14）年、東京府立第六高等女学校（現、東京都立三田高等学校）、1929（昭和4）年、東京高等師範学校附属小学校（現、筑波大学附属小学校）へ異動する。《まつぼっくり》等を作曲¹⁵。

『幼稚園のための指導書』が作成された際の文部省初等教育課長は、大島文義（1894-1986）であった。田邊の研究によると、国立教育政策研究所教育図書館所蔵『大島文義旧蔵文書』には『幼児のためのおんがくとリズムの本』要綱が所収される。以下はそこから抜粋する¹⁶。

- 一、音楽リズム教育の目標（酒田）
- 二、幼児の生活と音楽・リズム（山下）
- 三、幼児の生理的・心理的発達と音楽・リズム（山下）
- 四、音楽のきき方（音楽鑑賞）（真篠案）
- 五、自己表現
 - ・ひくこと（酒田）
- 六、資料
 - ・歌の解説（小林）

酒田富治・山下俊郎・真篠将・小林つや江によって執筆されている。中でも「歌の解説」を小林が担当していることから、歌唱教材は小林が中心となって編纂されたと推察される。

2. 『幼稚園のための指導書』における「歌うこと」

『幼稚園のための指導書』において「歌うことの指導」に関しては、「幼稚園では、楽しく歌い、みんなで歌う楽しさを味わわせることが重点であるから、技術的な指導に傾かないようにする」と記される¹⁷。選曲に関しては、以下の点が挙げられる¹⁸。

- ・歌いたがっている幼児の気持をむかえて、楽しく歌える歌を選ぶ。
- ・幼児に興味のある生活を歌ったもの。または幼児の身近な生活を歌ったものがよい。

このように幼児の興味関心や生活といった実態に基づいた選曲が推奨され、わらべうた、唱歌、童謡、といった子どもの歌のジャンルでは示されていない。

Ⅱ. 「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」

『幼稚園のための指導書』の付録には、「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」として39曲の楽譜が所収される。それらを一覧にしたものが表1である。

「わらべうた」「唱歌」「童謡」に分類すると、わらべうたが2曲（5.1%）、唱歌が26曲（66.7%）、童謡が11曲（28.2%）である。

唱歌が最多で66.7%も占める。唱歌の内訳については、1881（明治14）年発行の『小学唱歌集』から1曲、1901（明治34）年発行の『幼稚園唱歌』から1曲、1931（昭和6）年以降発行の『エホンシヤウカ』から21曲もあり、唱歌の中では80.8%も占める。その他、1935（昭和10）年発行の日本教育音楽協会編『児童唱歌』から2曲、1938（昭和13）年発行の日本幼稚園協会編『幼稚園新唱歌』から1曲ある。

表1 「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」

	曲名	作詞	作曲	伴奏	出典	調	拍子	音域	
1	桜	小林宗作	小林宗作	真篠将		F	2/4	f ¹ -d ²	童謡
2	ちょうちょう	<u>近藤宮子</u>			えほん唱歌 <u>春</u>	G	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
3	ひらいたひらいた			信時潔	日本童謡		2/4	e ¹ -d ²	わら
4	むすんでひらいて		<u>ルソー</u>		<u>小学唱歌集</u>	C	2/4	c ¹ -a ¹	唱歌
5	ぶらんこ	葛原しげる	小松耕輔				2/4	e ¹ -a ¹	童謡
6	かごめ			下総皖一			2/4	e ¹ -a ¹	わら
7	汽車ぼっぼ	安東肅	小林つやえ			C	2/4	e ¹ -d ²	唱歌
8	ちゅうりっぷ	<u>近藤宮子</u>	井上武士		<u>えほん唱歌夏</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
9	ままごと				えほん唱歌 <u>春</u>	a	2/4	e ¹ -c ²	唱歌
10	くつがなる	清水かつら	弘田竜太郎		<u>少女号</u>	D	4/4	d ¹ -d ²	童謡
11	こいのぼり	<u>近藤宮子</u>			えほん唱歌 <u>春</u>	C	3/4	c ¹ -c ²	唱歌
12	たんぼぼ	<u>近藤宮子</u>			えほん唱歌 <u>春</u>	G	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
13	とけい屋のとけい	広瀬としお	坊田かずま			F	2/4	c ¹ -c ²	童謡
14	雨	杉山米子	小松耕輔		<u>幼稚園新唱歌</u>	C	2/4	d ¹ -e ²	唱歌
15	ひよこ				えほん唱歌 <u>秋</u>	F	4/4	f ¹ -d ²	唱歌
16	おうちの前	倉橋惣三	平井保喜			C	3/4	c ¹ -d ²	童謡
17	金魚				えほん唱歌 <u>夏</u>	G	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
18	お舟	井上徹	江沢清太郎	平岡均之		D	4/4	d ¹ -d ²	童謡
19	水遊び	<u>滝廉太郎</u>	<u>滝廉太郎</u>		幼稚園唱歌	G	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
20	かみなりさま	<u>近藤宮子</u>			えほん唱歌 <u>夏</u>	D	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
21	砂山				児童唱歌	F	3/4	f ¹ -d ²	唱歌
22	かけっこ				えほん唱歌 <u>秋</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
23	海	天野蝶・ 一宮道子	天野蝶・ 一宮道子			D	2/4	d ¹ -d ²	童謡
24	遠足				えほん唱歌 <u>春</u>	D	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
25	菊の花				えほん唱歌 <u>2秋</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
26	もみじ	古村徹三			えほん唱歌 <u>2秋</u>	D	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
27	ちゅうちゅうねず み			真篠将	児童唱歌	D	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
28	お正月				えほん唱歌 <u>冬</u>	D	4/8	d ¹ -d ²	唱歌
29	郵便屋さん	倉橋惣三	弘田竜太郎			G	2/4	d ¹ -d ²	童謡
30	自動車				えほん唱歌 <u>春</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
31	おさる				えほん唱歌 <u>冬</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
32	雪				えほん唱歌 <u>冬</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
33	煙	津村満寿子	坊田かずま			F	2/4	c ¹ -d ²	童謡
34	豆まき				えほん唱歌 <u>冬</u>	D	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
35	あかちゃん				えほん唱歌 <u>春</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
36	ぎっこんばったん				えほん唱歌 <u>冬</u>	F	2/4	f ¹ -d ²	唱歌
37	おにごっこ				えほん唱歌 <u>春</u>	G	2/4	d ¹ -d ²	唱歌
38	おひな様				えほん唱歌 <u>冬</u>	F	2/4	c ¹ -d ²	唱歌
39	おもちゃのマーチ	海野厚	小田島樹人		<u>子供達の歌</u>	F	2/4	c ¹ -d ²	童謡

注 下線：筆者による加筆。わら：わらべうた。音域はドイツ表記。

1. 唱歌

以下、唱歌集ならびに楽曲の特徴を概観したい。

(1) 『小学唱歌集』

1881（明治14）年、文部省音楽取調掛編『小学唱歌集』は3編で構成され、《むすんでひらいて》は《見わたせば》という曲名で初編に所収される。海老沢敏は「明治末期から昭和初期にいたる幼児教育活動、保育活動の中で、《むすんでひらいて》という「遊戯唱歌」、あるいは「唱歌遊戯」のかたちで、幼稚園の教育活動や小学校の教育活動に位置づけられた」と考察する¹⁹。

《むすんでひらいて》は、1947（昭和24）年発行の小学校国定教科書『一ねんせいのおんがく』にも所収される²⁰。編集委員は、岡本敏明（国立音楽大学教授）、平井保喜（作曲家）、小林つやえ（東京高等師範学校教官）、勝承夫（作詩家）である²¹。『幼稚園のための指導書』と比較すると、伴奏譜が異なっており、『幼稚園のための指導書』の方が平易となっている。

(2) 『幼稚園唱歌』

1901（明治34）年、共益商社楽器店編『幼稚園唱歌』が発行される²²。滝廉太郎（1879-1903）が中心となって編纂し、日本初の幼児対象の伴奏付き唱歌集である。言文一致唱歌を実現し、子どもの生活や遊びを題材とする。今日でもよく歌われる、東くめ（1877-1969）作詞、滝廉太郎作曲の《お正月》が所収されていたが、『幼稚園のための指導書』では、『エホンシヤウカ』の《お正月》が掲載される。

《水遊び》は、滝廉太郎によって作詞、作曲される。

(3) 『エホンシヤウカ』

『エホンシヤウカ』は、日本教育音楽協会から1931（昭和6）年以降出版された。

日本教育音楽協会は、1922（大正11）年、小山作之助（1864-1927）を会長として、東京音楽学校出身者によって設立された。1929（昭和4）年、東京音楽学校長の乗杉嘉壽（1878-1947）が会長となり、理事の中には、小松耕輔（学習院、1884-1966）、小林つや江（東京高等師範学校附属小学校、1901-1987）、評議員の中には近森一重（東京市汐見小学校、1903-1976）らが出た。

この時期の小学校では、1911（明治44）年以降発行の文部省『尋常小学唱歌』が使用されていたが、子どもの心情や嗜好性を無視した歌詞、曲調等が課

題とされていた。そこで日本教育音楽協会は、1931（昭和6）年、『新尋常小学唱歌』を刊行する。編集委員長は島崎赤太郎（1874-1933）で、理事の福井直秋（1877-1963）が中心となり、協会の役員と数名の東京音楽学校教員によって編集された²³。1932（昭和7）年、文部省検定済となった²⁴。

一方、1930（昭和5）年、日本教育音楽協会は、幼稚園唱歌研究委員として、橋川なみ、草川宣雄、近森一重、中野義美、新国寅彦、福井直秋、船越富美子、松園郷美、戸倉ハル、卜部たみに委嘱する。さらに堀七蔵、菊池フヂノ、檜山京子、柴田みどり、水谷式男に幼稚園唱歌研究部委員を委嘱し、『エホンシヤウカ』が編纂される²⁵。

『エホンシヤウカ』第一輯『ハルノマキ』は、1931（昭和6）年12月、音楽教育書出版協会から発行される。1932（昭和7）年7月には『ナツノマキ』、11月には『アキノマキ』、1933（昭和8）年1月には『フユノマキ』が発行される。続いて1936（昭和11）年10月には、『エホンシヤウカ』第二輯『アキノマキ』が発行される²⁶。

『幼稚園のための指導書』に所収された21曲の『エホンシヤウカ』の楽曲の内訳は、第一輯『ハルノマキ』から8曲（38.1%）、第一輯『ナツノマキ』から3曲（14.3%）、第一輯『アキノマキ』から2曲（9.5%）、第一輯『フユノマキ』から6曲（28.6%）、第二輯『アキノマキ』から2曲（9.5%）となっている。

(4) 『児童唱歌』

『児童唱歌』は、1935（昭和10）年、日本教育音楽協会によって編纂され、音楽教育出版協会から発行される。尋常科第一学年用から第六学年用までの6冊に加え、『児童唱歌 伴奏譜』も第一学年用から第六学年用までの6冊が発行される。前述の1931（昭和6）年、日本教育音楽協会編纂『新尋常小学唱歌』とは別の曲が新たに掲載される。

井上武士によると、『児童唱歌』は『新尋常小学唱歌』と同じような組織で編纂された。1935（昭和10）年、文部省検定済みとなる²⁷。

『幼稚園のための指導書』では、《ちゅうちゅうねずみ》が掲載される。これは『児童唱歌』尋常科第一学年用に所収される。伴奏譜を比較すると、『幼稚園のための指導書』の方が平易である。真篠によって編曲されている。

(5) 『幼稚園新唱歌』

《雨》の作曲者である小松耕輔は、1906（明治39）年、東京音楽学校本科器楽部（ピアノ）を卒業後、

研究科に進学しながら、学習院の講師として着任し、初等科に入学した皇太子（昭和天皇）に唱歌を教える²⁸。1920（大正9）年、学習院の助教授に在職のまま、フランスに留学し、1923（大正12）年に帰国する²⁹。1924（大正13）年、教授に昇格、日本教育音楽協会の理事にも就任する。1927（昭和2）年、「国民音楽協会」を設立し、合唱コンクールを立ち上げる。翌年の1928（昭和3）年、山田耕筰らと「日本作曲家協会」を設立し、理事長に就任する³⁰。

1938（昭和13）年、東京女子高等師範学校体育科の教授として異動し、音楽理論、音楽史、和声学を担当する³¹。また、同年に発行された『幼稚園新唱歌』の作曲に関わる。歌詞は公募で選ばれ、『めだか』、『雨』、『蛍』、『ふしんぼ』の4曲が所収される。1939（昭和14）年発行の『幼児の教育』39号には、「幼稚園新唱歌」というタイトルで小松が、歌唱上の留意点について言及している³²。なお、『雨』は歌詞が2番までであるにもかかわらず、『幼稚園のための指導書』では1番のみしか掲載されていない。

小松は1949（昭和24）年、お茶の水女子大学文教育学部教育学科音楽教育学専攻の教授となる。また、1947（昭和24）年発行の中学校国定音楽教科書の編集委員会の顧問として従事する³³。

このように『小学唱歌集』、『幼稚園唱歌』、『エホンシヤウカ』、『児童唱歌』、『幼稚園新唱歌』から26曲も掲載され、『幼稚園のための指導書』の66.7%と最多を占める。中でも『エホンシヤウカ』から21曲も選曲されている。『エホンシヤウカ』『児童唱歌』ともに日本教育音楽協会編纂である。小林つや江が理事であったため、これらの唱歌集から多く採択されたと考えられる。

本稿では唱歌を分析対象としているが、童謡の傾向についても『幼稚園のための指導書』の特質を解明するためには大切なため、以下、童謡の作曲者の経歴等に注目して概観したい。

2. 童謡

(1) 弘田龍太郎

《くつがなる》は、1919（大正8）年、雑誌『少女号』（小学新報社）11月号に清水かつら（1898-1951）の詩に弘田龍太郎（1892-1952）によって作曲される。

《くつがなる》以外に、倉橋惣三の作詞により、『郵便屋さん』を作曲するが、初出は不明である。

弘田は1916（大正3）年、東京音楽学校本科器楽部（ピアノ）を卒業した。1920（大正9）年、東京

音楽学校助教授となり、1928（昭和3）年、文部省在外研究員としてドイツに渡り、翌年、帰国し、教授に昇格するものの、作曲に専念するため退職。1935（昭和10）年、NHKラジオにおいて「幼児の時間」の番組が放送され、弘田は歌唱曲の編曲や指揮を行う他、「リズム遊び」のコーナーに出演することもあった³⁴。

1947（昭和22）年、弘田は長女の妙子と彼女の夫の日本画家の藤田復生とともに、東京に「ゆかり文化幼稚園」を設立する。顧問として、倉橋、幼児教育家の内山憲尚（1899-1979）、童話作家の関谷五十二（1902-1984）、日本画家の野田九浦（1879-1971）、小松耕輔らを迎え、初代園長は弘田、美術を藤田復生、音楽を藤田妙子が担当する³⁵。

(2) 小田島樹人

海野厚（1896-1925）作詞、小田島樹人（1885-1959）作曲の《おもちゃのマーチ》は、1923（大正12）年、童謡楽譜集『子供達の歌』第二集（白眉出版社）に収録。小田島の本名は、小田島次郎。1914（大正3）年、東京音楽学校本科器楽部（ピアノ）を卒業し、東京市三光尋常小学校（現、港区立一貫教育校白金の丘学園）で1919（大正8）年まで教える。1920（大正9）年、三菱金属鉱業研究所図書係を1927（昭和2）年まで務める。1936（昭和11）年、郷里の秋田県立花輪高等女学校（現、秋田県立花輪高等学校）で教えることになる。1940（昭和15）年、秋田県立秋田中学校（現、秋田県立秋田高等学校）へ異動する³⁶。

(3) 坊田壽眞

坊田壽眞（1902-1942）は、1920（大正9）年、広島県師範学校の乙種講習科を修了し、畑賀尋常高等小学校（現、広島市立畑賀小学校）の訓導として奉職する。1922（大正11）年、小屋尋常小学校（現、広島県安芸郡坂町立小屋浦小学校）に異動する。在職しながら、雑誌『赤い鳥』の童謡作曲に応募し、1921（大正10）年8月号に《げんげの畑に》（北原白秋作詞、草川信伴奏）、1922（大正11）年8月号に《かに》（山口利国作詞、近衛秀麻呂伴奏）が掲載される。1923（大正12）年、小学校を退職し、東洋音楽学校（現、東京音楽大学）へ入学するものの、関東大震災に遭い帰郷し、二河尋常高等小学校（現、広島県呉市立呉中央学園）の代用教員となる。1924（大正13）年、同校に訓導として着任し、同年、『赤い鳥』9月号に《月夜》（金子てい作詞）が掲載される。

小松耕輔、葛原しげる(1886-1961)らの勧めで上京し、1929(昭和4)年、三河台尋常小学校(現、港区立麻布小学校)の訓導となり、器楽合奏の実践を導入する。1932(昭和7)年、『日本郷土童謡名曲集』(岡田日栄堂)を刊行。1933(昭和8)年、野口雨情(1882-1966)、藤井清水(1889-1944)、浜田広介(1893-1973)、藤沢衛彦(1885-1967)らによって「日本歌謡協会」が設立され、坊田は入会する。

1939(昭和14)年、病気療養のため広島県呉市に帰郷し、私立土肥高等女学校(現、私立清水ヶ丘高等学校)や女子教員養成所³⁷で教え、1941(昭和16)年、『日本旋律と和声』を刊行し、1942(昭和17)年、死去³⁸。

『日本郷土童謡名曲集』、1935(昭和10)年発行の『坊田かずま童謡曲集』第一編(新興音楽出版社)、1938(昭和13)年発行の『唱ひ方の附いた新幼稚園唱歌』(音楽出版協会)ともに、『とけい屋のとけい』、『煙』は所収されていなかった。

(4) 平井康三郎

初出は不明の《おうちの前》の作曲者の平井保喜は、平井康三郎(1910-2002)の本名である。平井は1934(昭和9)年、東京音楽学校本科器楽部(ヴァイオリン)を卒業。1941(昭和16)年、東京音楽学校助教授となり、1946(昭和21)年まで作曲を指導する。前述の通り、平井は、戦後の小学校国定音楽教科書の編集委員であった。

(5) 江沢清太郎

江沢清太郎(-1957)は、1905(明治38)年、東京音楽学校甲種師範科を卒業し、三重県立第一中学校(現、三重県立津高等学校)へ着任する。

1916(大正5)年4月、慶應義塾幼稚舎の唱歌教員となり、1945(昭和20)年3月まで務める³⁹。

1918(大正7)年、藤山一郎(1911-1993、本名、増永丈夫)が、慶應義塾幼稚舎へ入学する。1921(大正10)年、江沢の推薦で童謡歌手として選ばれ、『春の野』、『山の祭』、『半どん』、『何して遊ば』(大和田颯作詞、江沢作曲)のレコードが三光堂(後の日本コロムビア)から発売される。藤山は童謡童話会でも大いに活躍したが、江沢の「童謡歌手は大成しない」という信念に基づき、しばらく歌うことを控え、楽器や譜面を読むことに専念する⁴⁰。

1924(大正13)年、藤山は慶應義塾普通部へ進学し、講師として招かれていた、弘田龍太郎と出会い、東京音楽学校の分教場へも通う。ここで梁田貞から声楽、大塚淳(1885-1945)からヴァイオリンを教わ

る。1929(昭和4)年、東京音楽学校予科に入学し、1933(昭和8)年、本科声楽部を卒業後、ビクターへ入社する⁴¹。

1933(昭和4)年、「小学唱歌教材研究会」が組織され、2月に『小学唱歌 新曲選集』第一集が発行される。15曲の楽譜が入っており、弘田龍太郎、森儀八郎、中山晋平(1887-1952)、外山国彦(1885-1980)、小田島樹人、江沢清太郎、本居長世(1885-1945)が作曲しており、江沢も関わっている。続いて3月に第二集、4月に第三集、9月に第四集が発行される⁴²。表2は、江沢が作曲した一覧である。鹿島明秋(1891-1954)作詞の楽曲が2曲ある。《お舟》は所収されていない。キングレコードの童謡歌手であった川上みよ子が歌う《お舟》がレコード化されたという情報があるが、現在のところ確認できていない⁴³。

表2 『小学唱歌 新曲選集』江沢清太郎作曲

	題目	作歌
第一集	林檎の嘆き 四十雀	鹿島鳴秋 大多和颯
第二集	初雪小雪	鹿島鳴秋

(6) 小林宗作

小林宗作(1893-1963)は、群馬県吾妻郡三島尋常高等小学校を卒業後、下仁田尋常高等小学校(現、下仁田町立下仁田小学校)の代用教員を務める。1911(明治44)年、小学校教員検定試験に合格し、牛込尋常小学校(現、新宿区立牛込仲之小学校)訓導として着任する。1916(大正5)年、小学校専科教員を養成する、東京音楽学校乙種師範科に入学し、翌年に卒業。千寿第二尋常小学校(現、足立区立千寿小学校)、1918(大正7)年、山吹尋常小学校訓導となる。1920(大正9)年、成蹊小学校訓導を務める。1923(大正12)年、ヨーロッパへ留学する⁴⁴。

ちなみに、日本へ最初にリトミックを紹介したのは、歌舞伎俳優の二代目市川左団次(1880-1940)であった。1906年、ロンドンの俳優学校でリトミックを学んで、1907(明治40)年、帰国し、1909(明治42)年に小山内薫(1881-1928)と共に「自由劇場」を設立し、「リズムによる身体運動」を基礎訓練方法の一つに取り入れた⁴⁵。

また、山田耕筈(1886-1965)も紹介者である。1908(明治41)年、東京音楽学校本科声楽部を卒業し、研究科に進学した山田は、1910(明治43)年、渡欧

し、1913年までベルリン王立アカデミー高等音楽院 (Königliche akademische Hochschule für Music zu Berlin, 現、ベルリン芸術大学) で作曲を学ぶ⁴⁶。留学中、舞踊にも関心を寄せ、1913年、初めて舞台上で、モダン・ダンスの母と称される、イサドラ・ダンカン (Isadora Duncan, 1878-1927) の踊りを観て感銘を受ける⁴⁷。また、同年、ドレスデンの郊外のヘレラウにある、リズム・音楽・舞踊ヘレラウ学校 (Schule Hellerau für Rhythmus, Musik und Körperbildung) を見学し、ジャック・ダルクローズ (Jaques-Dalcroze, Émile, 1865-1950) の創始したリトミックを見学する⁴⁸。ちなみに、山田の親友である小山内も見学する。二人は帰国後、石井漢 (1890-1962) にリトミックを紹介する⁴⁹。

しかしながら、小林は上記の市川や山田の動向は知らず、ヨーロッパへ留学した後に初めてリトミックの存在を知る。小林にリトミックを紹介したのは、ジュネーヴで国際連盟本部の事務局次長を務めていた、新渡戸稲造 (1862-1933) である⁵⁰。

1923年、小林はパリのリトミック学校 (Ecole Rythmique de Paris, rue Vaugirard) に入学し、2年間リトミックを学ぶ。1925(大正14)年に帰国し、小原国芳 (1887-1977) と、成城幼稚園をつくり、リトミックを実践する⁵¹。1930(昭和5)年、再度留学し、パリのリトミック学校 (L' Ecole du Luxembourg de Paris) で1年間学びながら幼児教育を視察する⁵²。

1927(昭和2)年、小原が玉川学園を創設し、二つの学園の経営を行ったことにより、成城学園における借金と金銭の管理をめぐる問題が起こる。1933(昭和8)年には、小原を排斥しようとする「成城事件」へと発展し、小原は成城学園を辞任する⁵³。

1921(大正10)年、八大教育主張講演会において「自由教育の神髄」を発表した、千葉県師範学校附属小学校 (現、千葉大学教育学部附属小学校) 主事であった手塚岸衛 (1890-1936) は、批判を受け、1926(大正15)年、千葉県立大多喜中学校 (現、千葉県立大多喜高等学校) の校長として異動する。異動するものの、配属将校との対立事件を起こし、1927(昭和2)年に辞する⁵⁴。

ところで、1922(大正11)年11月から1年間、手塚と東京高等師範学校教授であった篠原助市 (1876-1957) は、ドイツへ出張する⁵⁵。手塚は篠原の教育理論を自由教育の根拠としており、同年に発行された『自由教育真義』において篠原が関を担当し、序を記している。ここで手塚と篠原の関係を整理しておきたい⁵⁶。手塚は栃木県師範学校を卒業し、

1905(明治38)年、東京高等師範学校へ入学。一方、篠原は愛媛県師範学校を卒業後、1901(明治34)年、東京高等師範学校へ入学する。1906(明治39)年、篠原は福井県師範学校に着任し、教育を担当する⁵⁷。1908(明治41)年、手塚も福井県師範学校に着任し、国語漢文を担当する⁵⁸。手塚は1912(明治45)年、群馬県第一師範学校 (1913年、群馬県師範学校と改称) を経て、1917(大正6)年、京都府女子師範学校、1918(大正7)年、京都府立桃山高等女学校 (現、京都府立桃山高等学校) へ異動する⁵⁹。篠原は、1913(大正2)年、京都帝国大学哲学科へ進学する⁶⁰。1919(大正8)年、篠原が東京高等師範学校教授、手塚が千葉県師範学校教諭、附属小学校主事として着任する。篠原は「京都にゐる間は殊に日夕往来し、教育上の問題について語り合った関係から、私は同君の教育上の意見については比較的よく理解してゐると信ずる」と述べる⁶¹。

実は、横浜からマルセイユへ向かう北野丸での42日間、手塚は石井漢と出会い、「やがて東京に帰った暁は同じ土地の隣りあわせに彼は小学校を、漢は舞踊学校をたてて二人の理論を实践しよう」と構想していた⁶²。東横線九品仏駅前の荏原郡碑倉町倉権現前 (現、東京都目黒区) に300坪程の土地を安く借り、建築に取り掛かった。1928(昭和3)年、石井漢舞踊詩研究所ができ、小林も講師を務める。その隣に自由ヶ丘学園が開校する。「碑倉町倉権現前」という地名を「自由ヶ丘」に改め、1929(昭和4)年、駅名の「九品仏駅前」を「自由ヶ丘」に改名する。自由ヶ丘学園は小学校だけではなく中学校もあったが、経営が苦しく、1935(昭和10)年、藤田喜作 (1887-1973) が校長となり、新たな男子中学校として分離される (現、自由ヶ丘学園高等学校)⁶³。1936(昭和11)年、手塚は亡くなり、石井が小林に「君が常にやりたいと言っていた教育を、ここで実現したらどうだ」と勧められ、成城幼稚園にいづらくなっていたこともあり、小学校を買い取ることになる⁶⁴。

そして1937(昭和12)年、トモエ幼稚園と黒柳徹子も通ったトモエ学園 (小学校) を創設し、校長を務め、リトミックを実践する⁶⁵。1945(昭和45)年の空襲で焼失し、1946(昭和21)年、幼稚園は復活する⁶⁶。

1942(昭和17)年、東京府社会事業協会付属厚生保母養成所が、トモエ学園に併設され発足し、小林は主事となる。1944(昭和24)年、厚生保母学園と改称されるものの、生徒数の減少等に伴う経営困難等の事情から、1953(昭和28)年、閉鎖され、東京

家庭学園を前身とする、白梅保母学園（現、白梅学園短期大学）に引き継がれる⁶⁷。

一方、小林は、1949（昭和24）年、国立音楽中学校（現、国立音楽大学附属中学校）、国立音楽高等学校（現、国立音楽大学附属音楽高等学校）、国立音楽学校（現、国立音楽大学）の講師として着任する⁶⁸。1950（昭和25）年、国立音楽大学の講師となり、創設された国立音楽大学附属幼稚園の初代園長を務める⁶⁹。

《桜》の初出は不明である。

(7) 天野蝶・一宮道子

天野蝶（1891-1979）は、1910（明治43）年、京都府女子師範学校を卒業し、宮津尋常高等小学校（現、京都府宮津市立宮津小学校）の訓導として着任する。1920（大正9）年、文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験（以下、文検と略記）で体操の免許を取得し、体操教員となる。1922（大正11）年、京都府立第一高等女学校（現、京都府立鴨沂高等学校）に在職していた天野は、戸倉ハル（1896-1968）と出会う⁷⁰。戸倉は東京女子高等師範学校附設第六臨時教員養成所家事科第一部を卒業し、修身と家事と体操の教員免許を取得した。1918（大正7）年、高知県師範学校に着任し、家事と体操を教えていた。1922（大正11）年、東京女子高等師範学校研究科に進学する。1924（大正13）年に卒業し、東京府立第六高等女学校（現、東京都立三田高等学校）へ着任し、1933（昭和8）年、東京女子高等師範学校助教授となる⁷¹。

天野は文検で音楽の免許を取得するため、京都府立第一高等女学校を退職し、上京し、レッスンに通うものの、オルガンを16歳、ピアノを26歳から始めた天野にとっては難しく、合格は果たせず、戸倉の伴奏者として講習会に同行する⁷²。1931（昭和6）年、40歳になった天野は、リトミックを学びにパリへ渡る。帰国後、「天野式テクニック・リトミック」を案出し、体操の授業にリトミックを取り入れる⁷³。1941（昭和16）年以降、東京音楽学校で「体操」を担当する⁷⁴。

1948（昭和23）年、『うたとゆうぎ（春の巻）』、『うたとゆうぎ（秋の巻）』、1949（昭和24）年、『うたとゆうぎ こどものこよみ』が出版され、「幼児リトミック（天野式）」が確立される。これらは、天野・戸倉・一宮道子（1897-1970）の共著により、二葉書店から発行される⁷⁵。

一宮は、1925（大正14）年、東京音楽学校本科器楽部（ピアノ）を卒業し、東京府女子師範学校や東

京府立第二高等女学校（現、東京都立竹早高等学校）で教える。1937（昭和12）年、金富尋常小学校における佐々木幸徳による音感教育の公開授業を参観していた。同年、笈田光吉の推薦を受け、武蔵野高等女学校（現、武蔵野中学校高等学校）に赴任し、1939（昭和14）年まで、絶対音感教育を実践した⁷⁶。

1942（昭和17）年、日本女子大学校附属豊明初等学校（現、日本女子大学附属豊明小学校）へ異動する。また、天野も1943（昭和18）年から1958（昭和33）年まで同校でリトミックを指導する。1946（昭和21）年以降は教職員名簿にも天野の氏名があり、1955（昭和30）年頃から日本女子大学の講師となる⁷⁷。天野は一宮について「天野式リトミックをよく理解し、効果的な音楽を作曲する人物」と評価する⁷⁸。

1964（昭和39）年、天野蝶編著『たのしいリズム遊戯集』が共同音楽出版社から発行される。そこには、『組曲 うみ』の中の最初に『うみ』が掲載されている⁷⁹。『幼稚園のための指導書』に所収されている『海』と同一の曲である。歌詞に関して、『幼稚園のための指導書』では「そら」に対し、『たのしいリズム遊戯集』では「おそら」に修正されている。譜例に関しては、『幼稚園のための指導書』では、歌唱に加え、トライアングル、カスタネット、大太鼓の器楽合奏が加わっている。一方、『たのしいリズム遊戯集』では、器楽合奏はなく、振り付けが言葉で説明され、「コロムビア C-458」のレコードが紹介されている。ピアノ伴奏はどちらにも付いており、ほぼ同じではあるが、『たのしいリズム遊戯集』では4小節の後奏も付けられている。『幼稚園のための指導書』は1953（昭和28）年と、『たのしいリズム遊戯集』より11年前に発行されているのだが、『海』が『幼稚園のための指導書』のために作曲された可能性は低いと考える。おそらく小学校や幼稚園においてリトミックを実践されていた際に創られたと推察される。

(8) 小林つやえ

東京高等師範学校附属小学校訓導であった小林つやえは『汽車ぼっぼ』について次のよう回想する⁸⁰。

私、子どもたちにたくさん歌をつくらせたの。歌集ができています。それは子どもたちが、生活の中で自分の歌を生み出さなきゃいけないと考えたからなの。文部省の『幼稚園のための指導書』の中に、『汽車ぼっぼ』というのがあるけど、あれは3年生がつくった歌です。

前述の通り、小林は『幼稚園のための指導書』の歌唱教材を編纂したと考えられるため、小学生の作詞に小林が曲を付けた中で、力作が教材として採用されたと推察する。

その他、小松耕輔が《ぶらんこ》を作曲しているが、初出は不明である。

以上の通り、10名の作曲家によって童謡が作られる。驚くことは、10名中8名が幼稚園ないしは小学校における実践経験があることである。それ以外の2名の作曲家についても唱歌集や教科書の編集に関わっており、音楽教育に接点がある。したがって、子どもの実態や音楽教育の現状を熟知している作曲家の童謡が所収されていることが分かる。

おわりに

『幼稚園のための指導書』における「歌唱ならびに器楽合奏に用いる曲」には、39曲の楽譜が所収され、わらべうたが2曲(5.1%)、唱歌が26曲(66.7%)、童謡が11曲(28.2%)という内訳で、唱歌が最多であることが判明した。唱歌の内訳については、1881(明治14)年発行の『小学唱歌集』から1曲、1901(明治34)年の『幼稚園唱歌』から1曲、1931(昭和6)年以降発行の『エホンシヤウカ』から21曲、1935(昭和10)年の『児童唱歌』から2曲、1938(昭和13)年の『幼稚園新唱歌』から1曲となる。このように『エホンシヤウカ』が唱歌の中では80.8%も占める。この背景には、日本教育音楽協会の影響があったと推察される。歌唱教材の編纂を中心になって進めたとされる小林つや江は、日本教育音楽協会の理事であった。また、『幼稚園のための指導書』の作成に関わった、近森一重も日本教育音楽協会の理事であった。このようなこともあり、日本教育音楽協会が編纂した『エホンシヤウカ』や『児童唱歌』から多数、採択されたと考えられる。

『エホンシヤウカ』や『児童唱歌』には新作の楽曲が所収されていた。一方、『幼稚園のための指導書』には新作の楽曲はほとんどなかったのではないかと推察する。残念ながら、初出を明らかにできない楽曲が残されている。以下に列記する。弘田龍太郎作曲《郵便屋さん》、坊田壽真作曲《とけい屋のとけい》、《煙》、平井康三郎作曲《おうちの前》、江沢清太郎作曲《お舟》、小林宗作作曲《桜》、小松耕輔作曲《ぶらんこ》。これらの楽曲については今後も調査を継続したい。

本稿の成果としては、小松耕輔作曲《雨》が『幼

稚園新唱歌』に所収されていたことを発見することができた点である。

当時の唱歌集編纂の際には、作詞、作曲者名は公表されていなかった。戦後の研究により、『新訂尋常小学唱歌』の作詞、作曲者は解明されつつある。それに対し、『エホンシヤウカ』『児童唱歌』等についてはまだ未着手である。この点についても今後、調査していきたい。

付記

本研究は、鳥取大学地域学部2019年度学部長経費「幼児向け「唱歌」のデータベース化と教材開発」の助成を受けたものです。

注

- 加藤繁美「保育要領の形成過程に関する研究」『保育学研究』第54巻第1号、日本保育学会、2016年、pp.6-17。
- 田邊圭子『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(1):戦後教育改革期における「遊戯」刷新の動きと坂元彦太郎の「リズム」の構想(昭和22年—23年)『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第7号、2014年、pp.67-76。
田邊圭子『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(2):保育要領改訂委員会資料(昭和24年)と関係者へのインタビュー調査から『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第8号、2015年、pp.69-84。
田邊圭子『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)刊行過程の研究(3):昭和24年10月以降の刊行経緯から『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第9号、2016年、pp.45-58。
- 入江眞理「「保育要領」(1948)、および『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(1953)における「リズム」の内容に関する研究:戸倉ハルと邦正美のリズム観とその影響について」『環境と経営』第24巻第2号、静岡産業大学経営研究センター、2018年、pp.47-59。
- 古山律子『幼稚園のための指導書 音楽リズム』(昭和28年)に関する一考察『千葉明德短期大学研究紀要』第38号、千葉明德短期大学、2018年、pp.77-87。
- 文部省『幼稚園のための指導書:音楽リズム編』明治図書出版、1953年、p.0。
- 田邊、前掲書、2014年、pp.67-76。

- 7 木村信之『音楽教育の証言者たち 下 戦後を中心に』音楽之友社、1986年、p.70。
- 8 諸井三郎・本誌「特集 戦後音楽教育の出発点 対談 戦後音楽教育の出発点を探る」『音楽教育研究』第14巻第8号、音楽之友社、1971年、pp.28-41。
- 9 酒田富治『幼児の音感教育テキスト』共同音楽出版社、2001年、pp.380-381。
- 10 上笙一郎『日本童謡事典』東京堂出版、2005年、p.215。
- 11 菅道子「昭和二十二年度学習指導要領・音楽編（試案）の作成主体に関する考察」『音楽教育学』第20-1号、日本音楽教育学会、1990年、p.5。
- 12 諸井三郎・酒田富治『保育のための音楽教育』厚生閣版、1958年、pp.6-7。
- 13 木村、前掲書、p.44。
- 14 田邊、前掲書、2015年、p.80。
なお、筆者は、2004（平成16）年10月24日（日）に真篠邸にて聞き取り調査を行った（滝沢美恵子氏同席）。
- 15 木村信之『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、p.125。
- 16 田邊、前掲書、2015年、pp.77-79。
- 17 文部省、前掲書、p.13。
- 18 同書、p.13。
- 19 海老沢敏『むすんでひらいて考』岩波書店、1986年、p.287。
- 20 文部省『一ねんせいのおんがく』東京書籍、1947年、pp.12-13。
- 21 井上武士『音楽教育明治百年史』音楽之友社、1967年、p.150。
- 22 共益商社楽器店編『幼稚園唱歌』共益商社楽器店、1901年。
- 23 上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか：教育と音楽の大衆社会史』新曜社、2010年、pp.167-191。
- 24 井上、前掲書、p.130。
- 25 長井覚子「昭和初期の幼児向け唱歌集に関する一考察：日本教育音楽協会編『エホンシヤウカ』を中心に」『白梅学園大学・短期大学紀要』51号、白梅学園大学・短期大学、2015年、pp.22-23。
- 26 同書、pp.23-24。
その他の先行研究として以下がある。
松永萌伽「今日の幼児教育における『エホンシヤウカ』の在り方」2019年度鳥取大学地域学部卒業論文。
- 27 井上、前掲書、p.139。
- 28 小松耕輔『音楽の花ひらく頃』音楽之友社、1952年、pp.67-70。
- 29 同書、pp.143-308。
- 30 井上さつき「小松耕輔と第1回合唱競演大音楽祭（1927）」『愛知県立芸術大学紀要』No.42、愛知県立芸術大学、2012年、pp.105-117。
- 31 『校報』第460号、東京女子高等師範学校、1938年、p.2。
- 32 小松耕輔「幼稚園新唱歌」『幼児の教育』39号、日本幼稚園協会、1939年、pp.7-9。
- 33 井上武士、前掲書、p.151。
- 34 大地宏子「童謡作曲家、弘田龍太郎の幼児音楽教育」『鶴見大学紀要』第49号第3部、鶴見大学、2012年、pp.9-16。
- 35 藤田復生『美しく生きる真に生きる』光村教育図書、1996年、pp.202-203。
- 36 佐川馨「小田島樹人の生涯と教育実践」『音楽表現学』vol.12、日本音楽表現学会、2014年、pp.27-36。
- 37 女子教員養成所は、呉市内にあった私立学校。1932（昭和7）年創立で、修業年限1年。呉市史編纂委員会編『呉市史』第五巻、呉市役所、1987年、p.601。
- 38 高田亘編『生誕百年記念誌 郷土の童謡作曲家 坊田かずまの世界』坊田かずまの会、2002年、p.67。
権藤敦子「わらべ歌の教材化に関する史的考察：坊田壽眞『日本郷土童謡名曲集』を中心に」『エリザベト音楽大学研究紀要』第23巻、2003年、エリザベト音楽大学、pp.2-4。
- 39 『慶応義塾総覧』大正5年10月印刷、慶應義塾、1916年、p.144。
慶應義塾幼稚舎編『稿本慶應義塾幼稚舎史』慶應義塾幼稚舎、1965年、p.239。
- 40 池井優『藤山一郎とその時代』新潮社、1997年、pp.16-24。
- 41 同書、pp.29-75。
- 42 第四集には「第五集は11月上旬頃発送の予定です」とあるが、発行されたかどうかは確認できていない。『小学唱歌 新曲選集』は、国立国会図書館を含めて全国の図書館において保管はなく、筆者は、けやき書店（東京都千代田区）から購入した。
- 43 「童謡歌手」『フリー百科事典 ウィキペディア』<https://ja.wikipedia.org/wiki/童謡歌手>（2020年5月3日閲覧）
- 44 佐野和彦『小林宗作抄伝』話の特集、1985年、pp.42-49、pp.87-93。
- 45 福島省吾「日本におけるリトミック教育の歴史的概観」『日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集 リトミック研究の現在』日本ダルクローズ音楽教育学会、開成出版、2003年、p.26。
- 46 後藤暢子『ミネルヴァ日本評伝選 山田耕筈：作るのではなく生む』ミネルヴァ書房、2014年、pp.57-60。
- 47 蒔田裕美「山田耕筈の舞踊創作におけるイザドラ・ダンカンの影響」『法政大学スポーツ健康学研究』10巻、法政大学スポーツ健康学部、2019年、pp.15-22。
- 48 後藤、前掲書、pp.161-163。
- 49 山野辺貴美子『をどるばか 人間 石井漠』宮坂出版社、1962年、pp.90-97。
- 50 板野晴子『日本の音楽教育へのリトミック導入の経緯：小林宗作、天野蝶、板野平の関わりを中心に』風間書房、2015年、pp.21-39。
- 51 福元真由美『都市に誕生した保育の系譜：アソシ

- エーショニズムと郊外のユートピア』世織書房、2019年、pp.137-156。
- ⁵² 福島、前掲書、p.29。
- ⁵³ 佐野、前掲書、pp.230-231。
- ⁵⁴ 本間道雄「手塚岸衛の実践と挫折：大正自由教育の一齣」『千葉敬愛短期大学紀要』第4号、千葉敬愛短期大学、1982年、pp.1-10。
中野光『教育名著選集⑥ 大正自由教育の研究』黎明書房、1998年、p.235。
- ⁵⁵ 志垣寛『教育太平記：教育興亡五十年史』洋々社、1956年、p.25。
- ⁵⁶ 川上具美「大正新教育期における手塚岸衛の「自由教育」について：教育方法および教育理念の検討」『西南学院大学 人間科学論集』第14巻第1号、西南学院大学、2018年、pp.26-27。
- ⁵⁷ 米澤正雄「篠原助市「批判的教育学」と彼の国体観との関係の解明：「自然の理性化」の、「社会による教育・社会の為の教育」としての展開」『東洋大学文学部紀要 教育学科編』第68集、東洋大学、2014年、p.145。
- ⁵⁸ 中等教科書協会編『明治四十一年十月現在 中等教育諸学校職員録』中等教科書協会、1908年。
- ⁵⁹ 宮坂義彦「手塚岸衛と自由教育：自由教育の成立過程における手塚岸衛の役割」『教育学研究』第34巻第1号、日本教育学会、1967年、pp.28-29。
- ⁶⁰ 矢野智司「第二章 京都学派としての篠原助市：「自覚の教育学」の誕生と変容」『日本教育学の系譜：吉田熊次・篠原助市・長田新・森照』勁草書房、2014年、pp.142-147。
- ⁶¹ 篠原助市「序」手塚岸衛『自由教育真義』東京実文館、1922年、p.3。
- ⁶² 山野辺、前掲書、pp.158-160。
- ⁶³ 自由ヶ丘学園高等学校「学園の歴史」
jiyugaoka.ed.jp/guide/history/
(2020年7月6日閲覧)
- ⁶⁴ 佐野、前掲書、p.232。
- ⁶⁵ 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社、1981年、pp.107-112。
- ⁶⁶ 佐野、前掲書、p.278。
- ⁶⁷ 古山律子「小林宗作の幼児教育思想と保育者養成観：厚生保母養成所時代(1942-1953)を中心に」『千葉明德短期大学紀要』第37号、千葉明德短期大学、2017年、pp.155-163。
- ⁶⁸ 美輪明宏は、1951(昭和26)年、国立音楽高等学校へ入学するものの、中退。
美輪明宏『紫の履歴書』水書坊、1992年、pp.147-163。
- ⁶⁹ 佐野、前掲書、pp.281-297。
- ⁷⁰ 板野、前掲書、pp.79-82。
- ⁷¹ 桐生敬子「学校ダンスの普及者 戸倉ハル」女性体育史研究会編『近代日本女性体育史：女性体育のパイオニアたち』日本体育社、1981年、pp.239-262。
- ⁷² 板野、前掲書、pp.80-82。
- ⁷³ 同書、pp.58-59。
- ⁷⁴ 芸術研究振興財団・東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史』東京音楽学校篇 第二巻、音楽之友社、2003年、p.1628。
- ⁷⁵ 板野、前掲書、pp.82-88。
- ⁷⁶ 長尾智絵「一宮道子による「絶対音感及和音感を基調とする女学校の音楽教育：昭和12年度の武蔵野高等女学校での実践に着目して」『音楽教育学』第47-1号、日本音楽教育学会、2017年、pp.37-48。
- ⁷⁷ 板野、前掲書、pp.92-97。
- ⁷⁸ 同書、p.87。
- ⁷⁹ 天野蝶編著『たのしいリズム遊戯集』1、共同音楽出版社、1964年、pp.2-3。
- ⁸⁰ 木村信之『音楽教育の証言者たち 上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年、p.137。